

教育開発推進機構 NEWSLETTER

# 教育開発ニュース!

VOL. 1  
NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University 平成21年(2009)11月4日

## 目次

- 『教育開発ニュース!』創刊に寄せて 國學院大學学長 安蘇谷正彦 ..... 2p
- 『教育開発ニュース!』発刊の辞 教育開発推進機構長 赤井 益久 ..... 2p
- 教育開発推進機構各センターの紹介 ..... 3p  
本学の教育力向上と教育開発センターの役割  
教育開発センター長 赤井 益久 ..... 3p  
共通教育センターがめざすもの 共通教育センター長 加藤 季夫 ..... 4p  
学修支援センターについて 学修支援センター長 柴崎 和夫 ..... 5p
- 新任教員対談会 ―授業担当の準備と実際― ..... 6p
- シリーズ「大学授業最前線―教員の努力!学生のみなぞし!―」  
教員の授業努力 東海林孝一(経済学部准教授、「管理会計Ⅰ,Ⅱ担当」) ..... 16p  
受講学生からのコメント ..... 17p
- 教育開発推進機構彙報(平成21年4月1日~10月30日) ..... 19p
- 私たちがお手伝いします!―教育開発推進機構教職員紹介― ..... 20p
- そったくどうじ啐啄同時―編集後記― ..... 20p

## 『教育開発ニュース!』 創刊に寄せて

國學院大學学長

安蘇谷 正彦



学校法人國學院大學は、平成14年に、建学の精神をより具現化した教育・研究の開発を目的とする「國學院大學21世紀研究教育計画」を、さらに平成20年4月には「國學院大學における研究教育開発推進に関する指針」を策定した。これらは、「教育」「研究」「人材育成」「国際交流」「施設」の基盤、すなわち「5つの基<sup>もと</sup>い」の整備を進め、もって「伝統と創造」「個性と共生」「地域性と国際性」の調和たる「3つの<sup>おも</sup>慮い」の実現を目指すものである。

この21世紀に生きる人間育成の新たな<sup>まな</sup>び舎としての基盤を整備するため、本学では平成21年4月、「学士課程教育」の更なる充実を目指し、「教育」に係る基本施策を推進する「教育開発推進機構」を設置することとした。

本機構は、全学にわたる教育改善の推進支援、社会から求められる大学教育の調査分析を進めるとともに、そのあり方を検討し、教養教育・資格課程における教育編成の策定・運用・評価などを担いつつ、それらについて大学全体に提言できるシンクタンクとしての機能が求め

られよう。

また、学生自らが主体的に学びの履歴を積み重ねていくことを支援し、学ぶ途上での「つまずき」に対してすみやかに時宜に応じた学修支援をおこなう体制を整えねばならない。すなわち、従来、前・後期の履修申請に際して一時的に実施されていた学修相談に加えて、恒常的・継続的な学修支援を行うことにより、学びの「つまずき」を最小にとどめて、学びの場への早期の立ち返りへの支援が望まれる。

研究と教育がその本来の使命たる大学に、近年、従前にも増して「教育力」が求められている。ここで言う「教育力」とは、ただ単に教職員の個人の力量を指すわけではない。個人の力量を高めてゆく努力は、またそれぞれに期待したいが、大学全体が組織としていかに取り組み、また制度として個人の努力を無にしない体制をいかに整えてゆくことが求められているのである。

したがって、本機構に期待されることがらは多い。全教職員には「教育力の向上」に組織的に取り組み、教育内容を不断に改善し、学生と真摯に向き合い、より良き教育改善に努める責務がある。こうした努力を支援し、促進する役割が本機構には期待されている。全ての大学構成員におかれては、本機構が十分な役割を果たし、将来にわたって教育力向上の推進役として機能するよう、ご協力とご理解をお願いしたい。

この新たに刊行される『教育開発ニュース!』が、本学教職員の教育改善に対する意識と、教育力の向上に資することを切に希望するものである。

## 『教育開発ニュース!』 発刊の辞

— 國學院大學における教育改善と

教育開発推進機構の創設 —

教育開発推進機構長

赤井 益久 教授



大学設置基準の大綱化以降、わが国の高等教育を取り巻く状況はめまぐるしく変化し、さまざまな改革が求められてきた。とくに平成13年度以降の本学における取り組みを概観しただけでも、「共通領域」の設定、副専攻制度の設置、成績基準としてのGPA導入、キャップ制の見直し、学習支援システムの構築と改善、語学教育の抜本的見直し、「教養総合カリキュラム」の

大幅改訂など、かつての教育体制とは様相を大きく異にしている。

こうした背景には、従来は学部学科が学生を受け入れ、その教育課程の編成に基づいた教育を行うという考え方から、一人ひとりの学生を「学ぶ主体」として位置づけ、その志向や視点に立った教育を提供するという「学士課程教育」の構築が求められてきたという社会的な要請がある。加えて、少子高齢社会の到来による大学進学者の減少、中等教育の指導要領改訂に伴う学力低下などからも、大学入学者の質の維持および卒業生の質保証といった面に目が向けられていったという経緯がある。

入学時における課題は、そのまま入学後においても不本意入学や学修意欲・目的意識の喪失などと結びつきやすく、成績不振の深刻化から休学・退学に至る場合がある。大学は、こうした現状を認識し、幅広い選択肢の提供、やり直しのきく制度、「学ぶ主体」としての意識喚起な

どさまざまな制度の整備を通して改善を試みてきた。

他方、制度面の整備のみでは限界もあり、併せて「人的支援」「カリキュラム支援」「システム支援」による学修支援体制の構築を進めてきた。

以上のような試みのもと、教育課程編成および教育内容の不断の改善、共通教育（教養教育や資格課程教育）のあり方の検証・検討、恒常的な学修支援・相談体制の充実などに対して全学的かつ組織的に取り組むことが喫緊の課題であることが認識され、それらを調査・分析し、具体案を策定・運用する組織設置の希求に応じて教育開発・共通教育・学修支援を推進する3つのセンターからなる「教育開発推進機構」が発足したのである。

教育開発センターは主としてFD活動の推進、教育活動における教員評価、外部資金獲得の申請支援などを、共通教育センターは教養総合カリキュラム・資格課程教育の検証と検討、初年次・リメディアル教育のプログラム検討・策定などを、学修支援センターは、修学相談の実施、学生の修学状況の調査・分析などを推進する。

さらに、大学に求められる今ひとつの大きな課題として、平成20年より義務化されたFD活動がある。本学では昨年度までFD委員会を置き、講演会やニュースレター等の刊行をはじめとする活動に尽力してきたが、本機構の発足を受け、同委員会の事業を受け継ぎつつ、より効果的かつ活発な活動を検討・推進する國學院大学FD推進委員会を設置した。

そして本誌は、前記FD委員会が発行していた『FDニュースレター』をその前身としている。しかし、教育に関する総合機関たる本機構が新たに発足したいま、単に教員の能力開発のみに捉われない、より広く大きな枠組みでの教育力向上を目指す本学の熱意を学内外に発信していくため、『教育開発ニュース!』と誌名も新たに本誌を刊行することとした。

本学教職員・学生はもとより、全国の大学関係者の皆様におかれては、本誌をご覧頂いて本機構の目指すところをご理解頂くとともに、忌憚のないご意見をお寄せくださるよう切にお願いする次第である。

## 教育開発推進機構各センターの紹介

### 本学の教育力向上と教育開発センターの役割

教育開発センター長 赤井 益久 教授

本学がもっとも誇るべき伝統、それは「教育力」といえよう。127年の長きにわたって若き学生たちを社会に送り出し、あるいは日本を代表する研究者として育成してきたという意味において、本学は比類のない存在である。「伝統」とは、先人が築いたものを受け継ぎ、発展させることによってはじめて伝統たりうる。本学伝統の教育体制をより鞏固にするための組織、それが教育開発センターである。

当センターは、建学の精神にのっとりた教育を具現化し、本学における組織的な教育力の向上を促進することを目的として設置された。その業務としては、まず本年度より新たに設置された國學院大学FD推進委員会（旧FD委員会）と緊密な連携をとりつつ、FD講演会や学生による授業アンケート、専任教員による授業見学などの、全学的な教育改善の取り組みや、各学部によるFD活動の支援をおこなっていく。

しかし、当センターの業務は、そうした、教員の授業能力の向上を目指す、狭い意味での教育改善活動（FD）だけにはとどまらない。本学の教育力を向上させるため

に、教育支援に関わる問題はもちろん、我が国や諸外国における高等教育をめぐる各種情報を収集・分析したうえで、本学に必要な教育・学修支援の制度の検討・設計が行われる。さらに教育に関する公的資金の獲得及びそのマネジメント支援も我々の重要な任務である。いうなれば、当センターは、我が国における中長期的な教育戦略を踏まえたうえで、本学の教育システムを検討し、プロデュースしていくのであり、その意味において、教育開発推進機構という組織におけるエンジン部の機能を果たしていくことが求められているのである。

当センターは4月に開設されて以来、昨年まで本学のFD活動を担ってきたFD委員会の業務の一部を継承しつつ、各種多様な業務を行ってきた。先ず、授業改善の問題については既存のFD講演会や授業見学、学生による授業評価以外に、学部との共催による公開講演会・シンポジウムの開催や、教育について本学教職員が気軽に話し合う勉強会「教育開発懇話会」を創設するなど、ステロタイプのFD活動から、本学独自の教育改善活動への模索を開始している。

次に、制度設計面や公的資金の申請・マネジメント支援に関しては、全学並びに経済学部が行った文部科学省「大学教育推進プログラム（テーマA）」への2件の申請に対し、発足とともにその支援にあたってきた。これに加えて後期からは、大人数授業を担当する教員を支援するためのチュードレント・アシスタント（SA）制度の

検討・策定と試験運用、教育活動面における教員評価実施の準備、建学の精神に基づいた新たなアドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシー策定のための調査・分析を進めている。なお、テキストや視聴覚教材の開発も当センターの重要な仕事の一つであるが、これについては来年度以降、本格的に取り組んでいく予定である。

以上のように、当センターは各大学一律の、画一的なFD活動を推進するセクションではなく、その目的は本学の伝統に基づきつつ、現状に合った、本学学生や教職員のための、本学独自の教育体制の構築と、それによる教育力の向上を担っている。その道のりは決して平易なものではないかもしれないが、学生諸君はもとより、全教職員とともに、一歩一歩あゆんでいければと考えている。

## 共通教育センターがめざすもの

共通教育センター長

加藤 季夫 教授



教育開発推進機構の3センターの1つである共通教育センターは、全学共通教育の柱となっている教養総合カリキュラムの開発とその推進、初年次教育のプログラム開発・運用および教職・資格課程等のプログラムの研究を行うことをその主な目的としている。

平成20年度から始まった新しい教養総合カリキュラムは、これまでの「教養総合カリキュラム」の理念は受け継ぎつつ現代社会の変化に対応するためにその枠組み等を大幅に見直したものである。すなわち、グローバル化という均質化に向かう世界と、多様化・複雑化を指向する世界とが重なり合う世界において、人として生きていくための知識と技能を身につけ、豊かな人間性を養うと共に、常に知的好奇心をもち、生涯にわたって学び続ける習慣と態度を身につけることができるようにすることを目的としている。このことは本学の理念・目的である「世界に開かれた日本文化の創造と発展に寄与し、日本文化を世界に発信できる有用な人材の育成」を可能にするものであるといえる。

教養総合カリキュラムは①基礎科目群、②人間総合科目群、③情報処理科目群、④応用科目群の4つの科目群を柱とし、人間開発学部ではさらに導入科目が設定されている。

これらのうち、基礎科目群は学部・学科に関係なく、國學院で学んでいく学生にとって最も基本となる神道科目、言語科目、スポーツ・身体文化科目で構成されている。共通教育センターではこれらのうち、すべての学修の基礎となる日本語力の強化を全学的にはかかっていくため、基礎日本語の検証を本年度中に、共通テキストの作

成を来年度に行い、國學院出身の学生はどの学部にもかわらず日本語能力が高いという状況を作り出すことに着手し始めた。人間総合科目群は個々のテーマに基づく授業で、さまざまな学問の手法や思考形式を具体的に提供し、学生に多角的に考える視点と学問の方法を理解・体験させる科目で、テーマ別講義科目、総合講座、総合演習、キャリアデザイン科目で構成されている。これらのうち、テーマ別講義科目は人間総合科目群の柱をなすもので、テーマを「生活と文化の理解」、「人間と社会の理解」、「心性と思考の理解」、「人間と環境・技術の理解」の4つに設定し、それぞれのテーマにおいてさまざまな授業を展開し、学生に「ものの見方・考え方」について多様な視点や発想の転換の契機を与えることを目的としている。共通教育センターではこのテーマ別講義科目の更なる充実を図るとともに、平成22年度から日本文化のより深い理解と経験をもたらす「日本文化体験型授業」をテーマ別講義科目内に開設するための作業に入っている。

初年次教育をもとに高校から大学への学修の移行を如何にしてはかるかがこれからの大学にとって極めて重要なものといえる。本学では初年次教育は始まったばかりで、文学部、神道文化学部、法学部、経済学部は専門教育において、人間開発学部は教養総合において行われている。共通教育センターはこれらの導入教育の再検討と初年次教育全体の研究を平成22年度に行うための検討に入っている。

本学は歴史的に教員を多々輩出しており、社会的に高い評価を得てきている。しかしながら、近年は採用枠の減少にも影響されて、必ずしも満足のいくものとは言えない状況におかれている。教職・資格課程等に関しては共通教育センターと担当研究室との連携を図り、より良いプログラムの作成を早急に行うこととなっている。

以上、共通教育センターとその課題について述べたが、組織は動き始めたばかりであり、全学的な協力なしには達成できないものばかりである。学生が卒業するときに國學院で学んで良かったと思える状況を共通教育センターの活動を通して作れればと考えている。

## 学修支援センターについて

学修支援センター長

柴崎 和夫 教授

教育開発推進機構の発足と同時に、今年の4月から学修支援センターも正式にオープンした。とはいえ、まだ仮住まいであり、大々的に看板を掲げるにはいたっていない。

この一年は、センターの存在を本学の学生・教職員にしっかり認知してもらうこと、がセンターの仕事の大きな部分を占めると考えている。このニューズレターも、皆さんに学修支援センターの役割を知ってもらう良い機会と考えている。

さて、教育開発推進機構が國學院大學に設置されるに至った経緯については、別の記事で触れられると思うので、ここでの話題は学修支援センターだけに限ることとする。

### 【学修支援センターの役割について】

センターの名称からも推測できるように、「学生に対する学修支援」がセンターの仕事の中心である。もう少し具体的に述べると、以下の項目について、主に、責任を持つことになる。

**1. 個別学修相談：**常時（月曜から土曜まで）相談員（名称は仮称）がセンターに在住し、学生一人ひとりに対応する。最低限専任の職員と教員が各1名は常駐する体制を取るようになる。相談内容は限定しないが、「学修」相談なので、履修相談、授業の疑問点、自宅学習の仕方、大学での勉強の仕方、等々になろう。

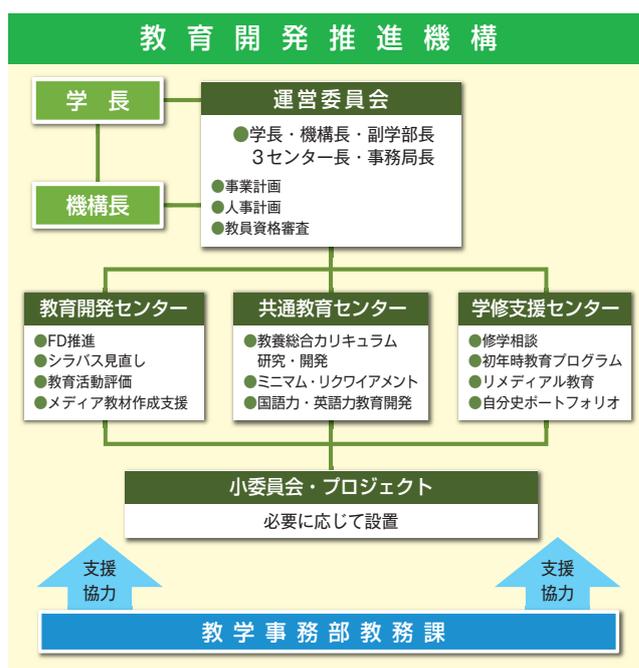
これまで、教員によるオフィスアワーや授業時での質問時間など、学生による教員への質問機会は、ある程度、システムとして確保されている。しかしながら、次の講義があったり、受講者（質問者）数が多かったり、時間の都合がつかなかったり、あるいは後になって疑問がでてきたり、などの場合、教員とうまく連絡がとれるとは限らない。また、直接教室で教員に質問できない（気分的に）場合もあろう。何を質問して良いかわからないが、何となく授業がわからない、授業外での勉強の仕方（予習、復習、調べ物etc.）がわからない、などなど。学生がかかえる様々な学修上の問題に対して、アドバイスをできるようにする。

**2. 基礎学力向上：**いわゆる「リメディアル教育」や初年時の「学力診断」実施に責任を持つ。高大接続とい

う言い方もあるが、大学に入学しても、大学で学ぶことに困難を感じる学生がでてきている。その理由の一つではないが、センターでは、基礎学力に問題を抱える学生の支援に中心的役割を果たすことになる。様々な講座等の運営が念頭にある。現状では、具体的な方策が決定しているわけではないが、各学部や教務部とも連携を保ちながら、よりよい大学生活の一步を踏み出せるようセンターとして考えていきたい。

- 3. なんらかのハンディキャップを持つ学生の支援：**國學院大學にも、様々な学生が在学している。一人ひとりの学生が十分に大学生生活を継続できるように、学生一人一人の状況に応じた施策を考え、実施する責任を持つ。
- 4. 学生による学修支援：**いわゆるSA（Student Assistant：学部学生による学修支援）制度の設計と運用を、教育開発センターと共同で運用する。大学としても初めての試みであり、少しずつ具体案を示していきたい。

センターも発足して半年であり、まだ学生に認知されるには至っていない状況である。10月からはセンターの部屋が3号館内に出来たので、今、このニューズレターを手に行っている皆さんの中には、既に部屋を訪れた人がいるかもしれない。この新しいセンターが学生一人ひとりの学生生活向上に役立つよう、センターの教職員と学生で協力して進めていきたい。最初は試行錯誤の連続になるかもしれないが、今後のセンターの仕事に対して、國學院大學の全ての構成員の方々に温かい支援と協力をお願いしたい。



# 新任教員対談会 —授業担当の準備と実際—

平成21年度から本学の教壇に立った新任教員の方々（専任、兼任）に集まっていただき、主に担当している授業の運営体験に的を絞り、①授業担当が決まってからの授業設計等の準備、②実際に授業を行って見たときの感想—受講学生の反応、成功や失敗体験、うれしかった事など—、③良い授業を行うためのアイデアや工夫、以上の3点について話合っていました。



## 対談日時

平成21年7月30日(木) 11:30~13:00

## 会場

國學院大學渋谷校舎 若木タワー4階 会議室04

対談参加者:(五十音順、敬称略)

赤井 益久 (教育開発センター長)

新井 大祐 (教育開発推進機構助教)

鈴木 崇義 (教育開発推進機構助教)

佐野 あつ子 (文学部兼任講師)

高屋 景一 (文学部助教)

森 悟朗 (研究開発推進機構助教)

司会: 中山 郁 (教育開発推進機構助教)

中山 先生方、大変お忙しいところお集まりいただき有難うございます。本日の司会を務めます、教育開発推進機構助教の中山です。今回の対談は、今年本学に着任されました専任・兼任の先生方にお集まりのうえ、授業を担当してみた感想や、授業運営上の工夫などについて、ざっくばらんに語って頂ければ、と思っ



新井 大祐  
(教育開発推進機構助教)

て企画しました。ご承知のことと思いますが、現在、大学の教育に対するニーズが社会的に高まってきております。本学におきましても、それに応えて本年4月に教育開発推進機構という新しいセクションを設置して、教育改善を本格化させようとしております。しかし、ひとことで「教育改善」と申しましても、単に全学的な、上からのFDだけが重要なわけではありません。FD活動において一番大切なのは、現場の先生方と学生とで形作って行く講義・演習・実習という部分でありますし、そこで授業を担当しておられる先生方の思いと努力こそが、大学をより良いものとしてゆくと私どもは考えております。しかし、私自身も経験がありますが、これまで若手の教員の方々は、研究を中心として一生懸命論文等を書いてこられたわけですが、そういう研究者の方々が新任の教員として、いざ教壇に立ちますと、教育経験の不足もあり、授業準備や運営について、様々な悩みや戸惑いを覚えることでしょうし、また、そうした試行錯誤のなかで学生とのつきあいが深まるとともに、「教える喜び」といったものも感じられてくることかと思えます。

そこで、今回の第2回教育開発懇話会におきましては、本学に4月に着任された先生方、さらに教育開発センター長の赤井先生に集まっていただきまして、各自が担当されている授業の運営体験に的を絞り、授業準備のあり方や、喜び、驚き、戸惑いなどについて、ご自身の経験や感想、意見などを率直に述べていただければと思います。

はじめに、今回初めて顔を合わせられる先生方も多いですから、まずは自己紹介を兼ねながら、授業担当が決まったときの気持ちや授業に対する意気込み、そしてどのように授業準備・

設計を進めていったかについて話していただければと思います。それでは、新井大祐先生からお願いします。

## 初めての授業担当と不安、悩み

**新井** 当教育開発推進機構と、研究開発推進機構の助教を併任しております、新井です。今年度、当機構の発足とともにその助教に着任しましたが、それ以前は、研究開発推進機構の助教として研究のマネジメントに携わっており、授業については教員とは言いながらも担当していませんでした。

今年になって初めて神道の授業を2コマ担当させていただきました。ひとつは「神道と文化」、これは教養総合の科目です。いまひとつの「神道古典3」は対象が「別科」で、これは、神職になる人たちのための実践的科目で、日中は神社で働き、卒業後に授業を受けに来るというかたちで、少人数の授業です。

授業のお話をいただいたときの気持ちですが、私自身が、神道文化学部の前身の文学部神道学科の出身です。それからずっと、大学院を通して本学に十数年もいるので、すこし前までは学生として聴く側に座っていたのが、出身大学の教壇に立つというのは感慨もひとしおでした。しかし、同時に戸惑いもあり、「神道と文化」のほうは教養的なことなのですが、「神道古典3」というのはかなり専門性が高く、特に神職を目指し、すでに実践の場で働いている方々が対象ですので、実践に即応することを教えなければならぬと思いました。しかし、なかなかこれが通り一辺の学問では済まない。実践的というのはどうすればよいのかということで、実際にシラバスを書く際にはかなり悩みました。

**中山** 次に、佐野先生、お願いします。

**佐野** 日本文学科の佐野あつ子でございます。私は、授業の担当ということは全く初めてです。大学を出て3年くらい会社に勤めて、その後ずっと専業主婦をしておりましたが、47歳の時に大学院に入り直しました。國學院の大学院には10年ほど前に博士課程から入学し、昨年度、学位をいただきました。専門は『万葉集』の女性の歌をやっております。今回担当させていただいた授業は「日本文学概説」といって、一応通年と前・後期の授業なのですが、蓋を開けてみますと、通年で登録する方はなく、前期・後期の概論のほうで皆さん登録しております。これは多分、中国文学科の1年・2年が主体なので、セメスターがあるせいだと思うのですが。

私の知っている大学の授業というのは、三十数年前的自分が受けてきた授業ですので——大学院の授業は最近受けておりますが——今の学部の授業の状況の見当がつかせませんでした。私には子供が3人おりますので、これまでは父母の立場で大学教育を見てきたわけですが、今回は教壇という場に立って、学生とどのように接して行けばよいのか、それが本当に不安でした。

授業設計といたしましては、中国文学科の1年・2年の教職必修科目で、概説ということですから、日本文学の基礎にどれだけ中国文学が取り込まれているのかを中心に教えて行くことを基本としました。具体的には、自分の専門が『万葉集』とい

うこともありますので、日本の古典文学の中に取り込まれている中国文学の例を、レジュメの中でたくさん出して、学生に見せるという形で授業を行うことにしました。

**中山** 三十数年前とおっしゃいましたが、その頃はまだシラバスというものはなかったでしょうから、シラバス作成など結構戸惑われたのではないですか？

**佐野** シラバスはなかったですね。それで、シラバスを書く際にはどうしようかと思ひまして、今までこの科目は辰巳正明先生のご担当でしたから、辰巳先生の書かれたシラバスですとか、本学・他大学の先生のシラバス等、ウェブで公開されているものを拝見し、参考にさせていただきました。私は辰巳先生のご指導のもとでやって参りましたので、辰巳先生の授業になるべく沿ったなかで、自分なりのものを出して行きたいと考えながら計画を立てて参りました。

**中山** 現代の学生も初体験なら、シラバスも初体験と。

**佐野** 本当に緊張してしまっ。最初の授業は覚えていないのです。

**中山** 鈴木先生、お願いします。

**鈴木** 新井先生と同じく、教育開発推進機構の助教で、鈴木崇義と申します。宜しく申し上げます。今年度発足の機構で、私も助教として今年からお世話になっているのですが、それとは別に、日本文学科の学生の必修科目である「漢文学概説」の授業をやってみないかというお話をいただきました。通年の授業として



鈴木 崇義  
(教育開発推進機構助教)

1コマ担当させていただき、現在週1で学生たちと勉強しております。

私は中国文学科の出身ですので、言わば佐野先生とはちょうど反対、ひっくりかえったようなかたちで、日本文学科の学生に、日本文学のなかで中国の古典がどのように活かされているのかということを知ってもらえればということで授業をやっております。日本文学科の学生ですから、お話をいただいたときは、まずは日本文学のなかには中国の古典がこんなふうにかかされているのだよ、ということを一時間に一個でも紹介できればいいと考えてきました。

シラバスについてですが、私の担当した「漢文学概説」は、中国文学科の授業として「中国文学概説」というのがありますが、ほぼそれに相当する内容の授業です。今回担当する授業のシラバスにつきましては、私は日本文学科の6・7組を担当しているのですが、担当者が複数おりますので、その代表者が執筆をするということで、私自身は執筆に携っていません。

それで出来上がったシラバスの内容を見てみますと、私が10年前に受けた内容とほぼ同じでした。ただ、これははっきり申

上げて、これだけを読んでも、学生はおそらく、「漢文学概説」といっても何をやるのかよく判らないだろうなど。そこで、これは実は赤井先生が最初の授業でやってくださっているのですが、シラバスの読み合わせを最初にやって、その解説から授業に入ってゆくことにしました。加えて、目標としては、漢文をある程度よめるようになるということと、中国文学の基本的な知識を理解するということができればよいのかなということ、計画をたててみました。教科書は指定のものがありまして、これをどうやって使ってゆこうかというのはずっと考えていましたものの、なかなか教科書通りには進めにくいということもあって、できるだけ補助プリントを使ってやっております。逆に言いますと、ちょっと教科書をおろそかにしてしまっているかな、せっかく学生に買ってもらった教科書を、上手く使えていないというのが、反省としてはあります。

## 学生の基礎学力レベルとテキストの選択

**中山** ありがとうございます。佐野先生と鈴木先生の場合は、文系の、それも古典系の授業を初めて担当されたわけですが、反面、高屋先生の場合は、あらかじめ非常勤講師の経験を積んだ上で本学に着任し、英語の授業を担当されています。そこで、今度は高屋先生に、非常勤時代の経験をも踏まえまして、新たに本学で授業を担当された感想などをお話いただければと思います。

**高屋** 文学部で、外国語（英語）を担当しております高屋です。國學院大学で教え始めるにあたって一番気になったのは、学生がどういう気質なのかということ、どういう話をすれば乗ってくるのかということでした。これはもう学校ごと、クラスごとに違うので、やってみなければ判らないということですね。シラバスを書くことについては、ある程度のもくろみというか、こういうことをしたい、という程度のことは書かないので、それほど問題はないのですけれども、一番困ったのは教材の選択です。学生の英語のレベルや関心が判らないので、今まで非常勤でやってきた経験のなかで、大体こういう内容、レベルのものであれば、使ってみて悪くないだろうという、そういうものを探しました。まあ1年とか2年とかやってみないと最終的には判らないので、それほど神経質になることはないと思うのですけれども、結局は大体のところ、市販の教科書といいますが、大学生向けに書かれたテキストというよりは、一般の本屋で英語の教材のところに並んでいるようなものの中から選ぶことが多かったです。というのは、そういうものを出している出版社は売れなければつぶれるので、やはり、売れるだけの内容を備えたものを出しているからです。ただ、非常勤でこれまで2～3年、毎年14、5コマを教えてきたのですが、やはり一つ、二つは企画倒れがでてしまう。良かれと思って選んだテキストが、全然受けないということがどうしてもあります。そういうのが出てきてしまうのは仕方がないのですが、まあ出てきたら、来年度は変えるも良し、使わず他のことをやっても良いだろうと。一応、そのような感じです。

**中山** 國學院に来て、学生の気質がクラスによって違うと仰っておりましたが、今回の授業ではどのような感じを受けましたか。

**高屋** 僕が困るのは、語学でも他の授業でもそうですが、反応してくれないことです。出来ないとか間違えるのは良いのですが、下を向いて黙りこくってしまうのが一番困る。ただ、ここではそういう学生が少ないというのが凄く良いですね。あとは1年生ですから、これから大学生活が始まるころなので、たとえば勉強の仕方も教えたいし、クラスの人たちと知り合う機会が英語の授業の中で出来ればよいなということで、極力しゃべらせるということには気をつけています。そのなかで、グループでやれと言うとちゃんとやってくれるのが、凄く嬉しかったです。

**中山** 教材の選択をするときに、学生のレベルや関心がなかなかつかめないということでしたが、それでは、授業担当前に、うちの大学は概ねこういう傾向だよとか、大体このようなレベルの学生さんに対応してもらいますよ、というようなことは、授業担当の話が来たときに示されたでしょうか。

**高屋** そういう話は結構しました。こちらからも訊きましたし、元々いらっしゃる先生方から伺ったこともあります。学部学科により違うという話もあったのですが、その辺りはまだちょっとよく判らないですね。この学科は出来るとか、この学科は真面目だとか、そういう話が出てくるのですが、それが全て正しいかどうかは判りません。

**中山** 森先生、お願いいたします。

## どのように教えるか？

**森** 研究開発推進機構助教の森悟朗です。宜しく申し上げます。簡単に自己紹介を申し上げますと、私は研究開発推進機構の研究開発推進センターに所属しているのですが、それが出来たときに教員に採用されまして、昨年度まで3年間勤めて、今年度から改めて助教に任用されました。

授業は今年から全く初めて担当させていただき、当初は大変緊張いたしましたし、同僚である中山先生はよくご存じかと思いますが、非常に舞い上がっていたといえますか、どうして良いか途方に暮れていたような状況でした。担当しているのは、新井先生とよく似ているのですが、「神道と文化55」という科目です。もう一科目は「宗教概説」という科目で、これは先ほど新井先生が説明していただきましたが、神職の資格を与える別科の通年の授業です。

シラバスについては、私は宗教学を専門としていますが、「神道と文化」と「宗教概説」、両方も宗教に関わるとはいえ、狙いとしては全く違う科目なので、蓋を開けてみたら200名ほど学生がおりまして、経済学部から法学部から人間開発学部から、あらゆるところから学生がきている。200名というのは想定していませんでしたが、とにかく、神道に関する知識はほぼゼロであるものと仮定して考えました。これまで高校等で日本史等は習ってきているものの、

体系的に神道史とか、宗教史とか、文化史とかいうものは習ってきていない。自分が受けてきた授業を思い返してみても、ほとんど政治史や経済史に押されて、せいぜい仏教を少し紹介する程度で、基本的にゼロであると。そこで基本的な言葉の説明から始めようと考えました。辞書等をあたり、言葉の意味を教える。そのときやはり、言葉の意味とその背後にある歴史等も教えるということになります。もっとも、後でお話することになると思いますが、そちらのほうに授業がひっぱられてしまうことにもなりました。私が主に研究しているのは社寺参詣ということで、そちらに引きつけた具体的な授業を展開したいというふうに考えていたのですが、神道の概説という方向に話がひっぱられてゆきました。

「宗教概説」のほうは、こちらは神職を目指す学生ばかりです。はっきり申し上げて、私などより神道を肌で知っている人たちに対して、宗教学、世界の宗教を教えるということとして、これは全く違う、とやっていたと思います。そこで、そのときに、今度は逆に、この学生たちは宗教のことは余り知らないのだと考えて、基本的なキリスト教やイスラム教の知識について、私も勉強しながら判りやすく教えて行きたいというふうに考えてシラバスを組みました。

私の所属する研究開発推進機構では、同僚が緊密に連携をとって日々研究業務を行っておりまして、その中で、実は私の「宗教概説」の前任はここにいらっしゃる中山先生でして、シラバスを組む際には中山先生からマンツーマンで逐一かがって、現在も映像資料等共有させていただいておりますが、そういう同僚の先生方からのアドバイスに大変助けていただいております。これも後でお話することになると思いますが、そういう教材の共有ですとか、教育の現場での経験の共有というのは、非常に大切なことなのではないかと考えております。

## 学科、課程のカリキュラムと担当授業

**中山** ありがとうございます。確かに高屋先生のお話にもありましたが、同僚の人たちから授業運営に関する話を聞くことができるのは、凄く良いことなのだと思います。私の場合は森先生と反対に、最初に別科の授業を担当したときには、一体全体どのようなことを教えて行けばよいのか、前任者の方にもほとんど訊くことができず、非常にきつかったという思い出があります。その意味では、やはり授業について相談できる同僚の存在というのは大きいのだと実感いたします。

ところで、みなさんが授業担当が決まったときに、自分が任される授業が、その学科や課程のカリキュラム全体の中でどういう位置づけにあるのか、どういう内容を教えて行けばよいのか、といったようなことについては、どの程度知ることが出来たでしょうか、また、各学科や課程から、どのように示されたでしょうか？

**新井** 「神道と文化」のほうは今年度から校史教育、自分の大学の歴史ですね、それを冒頭2回を使って教えるということが決まっています。その部分に関しては、私の所属する研究機構

の校史・学術資産研究センターの教員がテキストを作りましたので、あらかじめ、一度担当予定の教員を集めて、その作成者による校史教育の意義ですとか現在の流れについてのレクチャーがありました。ただ、3回目以降で行う各自の授業の内容については、特段の説明はありません。

他方、別科・専攻課程というのは、神職資格を取るための課程です。神職資格は神社本庁が授与しており、神社本庁から必ずこれは教えねばならないという講義の概要の冊子があるから見ておくと良いと、先輩の中山先生からご教示はありました。ですので、そちらは厳密な方向性が示されております。

**中山** 佐野先生の場合はどうでしょうか、例えばご自分が担当される授業が、文学のカリキュラム全体の中で大体どういう位置を占めているのか、そういう話というのはありましたでしょうか。

**佐野** いえ、別に何もありません。好きなようにやってください、ということでした。概説・概論をやるということなので、確かに自由ではあるのですけれども、それだけに、どう手を付ければよいか、本当に困りました。

**中山** 自由なだけに、どういうふうに、何をどこまで教えればよいか。暗中模索ではないですけれども、自分で作り上げて行くしかないというような？

**佐野** 最初は、何かに頼ろうとか、色々と考えたのです。教科書も4、5冊ほどを中心に、今まで使われたもの、他大学のものなども見てみたのですが、結局は「いない」と思いまして、授業ではベースにするものを1冊だけ紹介し、必要箇所をコピーして使いました。あとは全て、自分で用意した資料を使って進めて



佐野あつ子  
(文学部兼任講師)

ゆきました。自分のためということもありました。実を言いますと、授業をやりながら、私は何てなにも知らないんだろうということが身にしみて、そのため一つ一つ、自分で資料を作って行きました。その結果レジュメの量が多くなってしまったので、学生にとっては迷惑だったかも知れません。

**中山** たしかに、学生さんに教えながらも、自分でも勉強してゆくということは、森先生も仰っていましたが、かなり共通しているかと思います。それに対して鈴木先生の場合は、先ほどのお話からすると、カリキュラム内での位置づけということについてはかなりの程度明確だったのではないかと感じましたが。

**鈴木** 日本文学科の学生が漢文というものに触れる最初の機会なんだ、ということについては判っていました。4月初めの段階で兼任講師のための懇談会があり、「漢文学概説」は漢文の訓読力を養成するように進めてくださいという話があって、教科書はこれですよ、さあやってくださいと、そういう形で参

ました。

佐野先生も話されていましたが、自分も改めて、ああこういうことは忘れていたな、と思いながら進めていました。ただ、佐野先生は教科書は使わないというやり方をしておられましたが、教科書通りに進めるというやり方は、確かに授業の指針は得られると思いますが、その教科書の構成から授業をどうすすめるかというのはなかなか見えにくいものがあります。それで、私も補助プリントという形をとり、一応時代順に文学の流れというものがあるのだと。そのなかで、作品を幾つか紹介して読んでゆくと。一応、教科書に載っているものに関しては教科書に即して解説して行く。それ以外で、これは読んでおいたほうがよいなというものは、私が受けた中国文学概説のなかであれば面白かった、読んだらいいなと思うものをいくつかピックアップして、他の教科書からコピーしたり、場合によっては自分で打ち込んで資料を作成したりしまして、それに加えて、キーワードを幾つか加えたものをプリントとして配布し、それを手がかりとして授業を進めて行くという形で行いました。授業の最初に、プリントをまとめるためのファイルを一冊作っておいて下さい、というのは学生に言いましたが。

**中山** ところで、高屋先生の場合は、同僚とだいぶ情報交換ができたという話でしたが、そういうようななかで、担当されている語学の講座の位置づけについても、大分知ることが出来たということでしょうか。

**高屋** それは一応聞きました。ただ、私自身がそれぞれ学生の身になって、例えば法学部に属していたらこういう授業は必修で、とかそういうふうには知っているわけではないので、一応説明はありましたし、冊子も色々読んだのですが、まだまだ明確に、実感を持っては把握できていません。



高屋 景一  
(文学部助教)

**中山** 他の大学から来られたということでは、森先生も同じかと思いますが、いかがでしたか？

**森** 教務部委員の先生から簡単にご説明を受けたことと、研究開発推進機構の機構長から日常的に、担当する講義について、どういう授業だというようなことはうかがっておりました。「神道と文化」というのは、以前は「神道概説」という授業で、1年生がそれを受けた後に専門の科目に入って行くということで、それでは神道の基本知識から教えなければならないな、ということを認識しつつ進めました。

**中山** そうしてみると、まず、同僚とか先輩からの情報というのは、やはり我々教員が勉強してゆく上で非常に大きな力になるのだということですね。ただ今迄の話を伺った限りでは、カリキュラムの問題については、学部学科によって多少温度差が

あるような気がしてなりません。その点については赤井先生、どのようにお考えでしょうか。

**赤井** 教育開発センター長の赤井です。私は学内の教務関係の制度設計を10年ばかりしてきました。そうした制度設計の際に、上からといたしますか、外から色々な教務関係のものを取り決めて行く場合に一番注意しなければならないのは、教育の現場について出来るだけ理解して、それを制度に反映させることだという思いが強かったものですから、こういう企画をさせていただいたわけです。



赤井 益久  
(教育開発センター長)

私は、実際に教務部委員、教務部長としても働いてきたのですが、そのなかで一番痛感したのは、カリキュラム・デザインが弱いということ。今3つのポリシーということが言われていますけれども、本学が一番弱いのはそのカリキュラム・ポリシーなのです。実は、カリキュラムというのは全体と部分との関係が重要で、先生方は部分を担当なさるのですが、全体を把握した上での部分という認識を持っていただく必要があります。そうでなければ、学生にとってみれば、仮にそういう打ち合わせも相談もなく行われた場合に、同じような授業が行われたり、大事な教育内容が欠落することが起こりがちとなります。そういう意味での棲み分け・整理といいますが、コースデザインということが意識される必要があるだろうと考えています。このことについては今、各学部や教務部を通じて授業を担当する先生方をお願いをしていますので、従前のような重複ですとか、齟齬は無いと思うのですが。しかし、本学の全てのコマ数は約1900弱あります。それらが有機的に関係しているものですから、やはり今後ますます、部分と全体の関係をしっかり意識しながら見てゆく必要があるだろうなと思っています。

## 授業運営のよろこびとよみ

**中山** どうもありがとうございました。授業を担当するにあたっての皆さんの準備状況がよくわかりました。そして皆さん授業を担当してから、この7月で半期が過ぎたのですが、そのなかで、様々な気づきがあったかと思います。ところで、実際に学生さんと向き合って、いざ授業を始めたときに、どのような感じだったのか。たとえば、授業をやってみて、どんなときに喜びを感じたか。ああ成功したな、よかったな、うまくいったなと感じたこともあると思います。例えば先ほど高屋先生は、國學院の学生が英語の授業の時に積極的に答えてくれる、よかった、ということをおっしゃってましたが、しかし、裏を返せば、そこで黙りこくってしまったら授業は上手くゆ

かなくなってしまうわけですね。そのような、うまくゆかなかつたとか、失敗したとか、学生が寝てしまったとか、予測が外れたり、失敗してしまったりという点もあろうかと思えます。そうした、授業を通じた喜びや反省点などありましたらお話いただきたいのですが、いかがでしょうか。

**新井** 私の担当する「神道と文化」は120名弱学生がおりますが、まあほとんどは1年生ですから、真面目に聴いてくれる。これがもう少し学年が上になって慣れてきて、100名超えれば、かなりザワザワするでしょうし、後ろのほうで好き勝手にやるような人間も出てくるかも知れないわけですが。まあ、幸い1年生がメインで、特に前期ですから、まだ緊張感がある段階でしょう。ですから私が成功だとか失敗だとかいう以前に、環境的に救われていると思えますね。

それで、実際学生を前にしてどうだったかと言いますと、やはり、最初に注意事項を徹底して示しておくの良い気がします。私語は許さない、ひどいと退出させる、と。そして、理由を説明する。うるさいからというのがありますし、また、君は授業を受ける権利があるけれども、周りの人も同じ立場である。君が私語をして、周りの人が聞こえなかったりしたら、それだけで他の人の権利を奪っているんだから退出を命ずる、と。結果、退出者は1人も出ませんでした。

最近思うのですが、きちんと理由まで説明しないと判らないのではないかな、という懸念があります。何で私語をしちゃいけないのか、何で勝手に出てゆくのがいけないのか、ということ。私が知っている別の大学の先生のお話なのですが、その先生はもっと厳密に、最初の授業でペーパーを配る。これと、これはしてはいけない。これをすれば退出だし、これをしたら単位を出さない。これをしたらその日の出席は認めない、と。学生は最初にそのように明示しないと判らないので、そこまでやっておいた方がよいとアドバイスを受けました。私はそこまでは準備できなかったのですが、やはりそれくらい厳密にやるべきなのかな、という気はします。

で、してはならない、その前提の理由まで言っておくと、一応納得はしているような感じは受けます。ただ、そこまでガチガチにはやらないで、例えば、原則、携帯の電源は切っておく。ただし、どうしても今日、緊急の用事で電話が来る可能性があるというのであれば、別に電源を入れておいても良いし、授業中に私に事情を説明した上で外に出て電話をしても構わない。その時は申し出るように、というような「原則の幅」というのは意識して気をつけました。

**中山** いま、新井先生から授業運営時のコツのことも出ましたが、こちらが提示した話題に限らず、気がついたところから、ざっくばらんにお話いただければと思います。たとえば新井先生が触れていた、言わなければ判らないという世界など、佐野先生の場合、昔の大学の学生だった頃のイメージがあって、現在の学生を相手にされることになって、それでいざ授業が始まった時の感想というのはどうでしょうか。

**佐野** 全然違います。私たちの時代はもちろん携帯はございませんでしたし、私語はとんでもないことでした。寝るとい

とも、今の学生は突っ伏して寝てしまう。私たちの時代の学生も、もちろん眠いということはございましたけれど、なるべく判らないように……。ですから、学生への説明ということは、私たちの時代にはほとんど必要ありませんでした。けれども、私も色々な先生方から、今は説明をしないといけない、その代わり説明をすれば守るよ、ということは聞いておりましたので、最初の授業の時に、新井先生ほどではございませんでしたが、一応説明をいたしました。授業の出席者は1年生が中心ですが、学年は4年生まで、学部についても色々な人がおりました。どうか様子を見ながら、私語はやはり迷惑だからということで注意をしましたし、また立って出てゆく人に対しては、どこへ行くの、いなさいということで怒りました。それ以降はおとなしいですね。その行動を起こした人を、実際に口頭で注意をしますと、そのあとは静かで、出てゆく子もいません。

**中山** 学生の授業に対する食いつき、といったような点ではどうでしょう。

**佐野** おとなしいですね。自分のことで申し訳ないのですが、先ほど私が自分で資料を作ると申し上げましたのは、高校の時に『万葉集』や古典をやっている、抜粋されたほんの一部分しか知らないのではないかと思ひまして、資料をたくさん、とくに重要なわりには扱われることの少ない序文を読んでみることにしました。『万葉集』には序文はありませんが、『古事記』、『懐風藻』、『古今集』の序文を全文見てもらい、日本文学と中国文学がどれほど深く結びついているかよく見て下さいという形で示しました。理解がどうこうというよりも、見るということ、知るといことが大事だと思ひましたので、資料を見せることを重点的にやったつもりです。ですから、おとなしいのは退屈でおもしろくないからではと心配していました。でも、レポートは授業内容が反映されたものが多かったので、少し安心しているところです。

**中山** 鈴木先生はいかがでしょう？今年はかなり熱心にペーパーを配ったり、計画を練ったりしていましたが。

**鈴木** 私は最初の授業では、1年生が対象ですから、まずは出席について、教室に入ったら学生証をカードリーダーに必ず通すくせをつけろと言いました。他の授業でも必ず役に立つからということで、初講・2回目・3回目くらいに「ちゃんと通した？通してなかったら、今通してきていいよ」といって、とにかくこの國學院での授業を受ける時に、最初に何をしなければいけないかということは言いました。それと、リーダーを通すのとは別に、B6～A5くらいの大きさのコメントペーパーを毎回配りました。今の学生は——私の世代もそうかもしれませんが——漢文の場合によってはやらなかった、あるいはやっただとしても所謂旧字体になかなか触れる機会がない世代です。ですから、漢文の短い句などを板書して、コメントペーパーに書き写させて、返り点をつけさせる。私が最終的に範を示すのですが、最後にそれを回収して、私は担当授業数が1コマで、多少時間の余裕がありますからそれをチェックして、返り点の付け方や漢字に間違いがあれば直して、次の授業の最初に返却すると、そういうかたちをとりました。これは私に文学史を教

えてくださった先生の方法を拝借したものです。またそのなかで、初講の時に「漢文を高校の時勉強したことがある人は？」と訊いてみれば、これはほとんどの人が手を挙げました。そこで、その時にどのようなものを行ったかということコメントペーパーに書いてもらい、また、漢文や中国について知っているキーワードを思いつく限りでいいから書いてみてください、それで回収してもらったのですね。するとかなり書いてくれました、まあ、字の間違い等はご愛敬ですけれども。色々コメントペーパーに書いてくれたので、これはかなり志向性も強いし、1年生でやる気もあるし、やってゆけるかなと感じたのです。ところが、前期の試験が終わった後に、学生から「はっきり言って先生のしゃべることは難しい、よく判らないことが結構あった」と言われた。自分は、彼等はある程度知っている、それではもう少し深い所までやってみようと思ったのですが、そこに学生の意識とのずれがあったのだなということ、前期3ヶ月間やっていて、学生から教えてもらいました。訓読力、読解力というものをもう少し気をつけて見てゆかなければならなかったのだなと。私の授業は後期がまだ残っていますので、そこで何とかやってゆけたらいいなと思っています。

ただ、コメントを毎回書かせると、そのわきに、今日の授業の話は面白かったとか、あとはちょっと横道にそれたりしたことがあると、その横道の話が面白かったとか、あるいはもう少し訓読の時はゆっくり話してもらえるとありがたいとか、そういう注文や感想などを書いてくれた学生が、私の授業は69人登録して大体65人くらい出席してくれているのですけれども、多いときには10人近くおりました。せっかく受けた質問ですから、それをクラスで共有したいという気持ちもあるのですが、それもなかなか難しい。例えば学生の名前を伏せ字にしてやってみようかとも思ったのですが、公表するとその時点でもう萎縮して、次回からコメントを書かなくなっちゃうかなというもの一方ではあって、躊躇しているところではあります。無論、彼等・彼女等の質問や意見にはきちんと答えるということは心がけています。

**中山** コメントペーパーが非常に有効であるし、それがまた授業を成長させる上でも、学生を反応させる上でも良いということですね。

**鈴木** ただ、ほとんどの学生はそこまで書いてこないわけですから。そういう見えない沈黙のところを読みとらなければならぬのだらうとは思いますが。書いてくる学生というのは意欲のある学生ですから問題ないのですが、ぼーっとしている学生や、もう授業を受けるのが嫌になっている学生もいるかもしれない。そうした相手に、どういうふうアプローチしてゆけばいいのかな、というのがあります。

## 授業運営テクニックの工夫

**中山** たとえばそうすると、いま鈴木先生から、先生の担当している学生は比較的志向性が高い。高いけれども、中には必ずしもそうではない学生もいる。それでも、比較的志向性が高い。

反面、語学になりますと学生の取組みの姿勢は大分ばらつきがあると思います。英語をきちんと学びたいという学生もいれば、とりあえず単位を取らないと卒業できないというような人たちもひっくるめて高屋先生の所に入っていると思うのですが、そうすると、どうやって授業をやってゆくのか。また寝ちゃいな、突っ伏しちゃうような学生に答えさせてゆくという、かなりテクニックもいるかと思うのですが、高屋先生、その点いかがですか。

**高屋** 語学が苦手とか、そういうのはいいんですね、たとえば授業を受けてみて、私は英語が嫌いだと、見切りを付ける人が出てそれはそれで構わない。そういう意見がはっきり判って来れば良いわけです。英語への関わり方としては、できるようになりたいという人もあると思います。また、何に使いたいかなというの色々あると思います。例えばTOEICで就職に有利だからという人もいるでしょうし、映画を観たいという人もいるでしょうし。まあ、私は英語ができないけれども、通訳を付けてもらえるくらい偉くなるんだとか(笑)、それでもいいんですね。そういう自分なりの英語に対する意見を持ってもらえば良いと思っています。できなきゃいけないというふうには決して思いません。

それと、授業のテクニックという意味では、どのくらいテクニックがあるか判りませんが、そうですね、一番気に掛けているのは、受験英語から離れるということです。受験英語というのは非常に孤独な作業で、一人で勉強するという——たまにファミレスに行くと、友達と一緒に勉強している学生もいますが、場は共有しているけれども、一緒に勉強しているわけではない。そういう勉強をして、しかも苦手な英語であれば、これは当然授業中寝てしまうと思います。なので、僕はわりとグループでやらせることが多いです。グループでやらせると無駄なおしゃべりが増えるということはあるのですが、そこはあえて目をつぶる。グループで作業をするという時間をできるだけ作るようにしています。そしてテーマを与えて……食いついてくるようなテーマを考えるのがまた難しいのですけれども。テーマを与えて、そこで話して貰う。英語でずっと話さなければいけないというわけではないのですが、そういうのをたくさん入れています。

それから、もう一つ、学生を寝かせてしまう最上の方法というのは、情報を最初に与えてしまうこと。知識を最初に教えてかかると、すぐに寝てしまうと思いますね。まずやらせて、自分はここが判らないというのを判らせた上で、ちょこっと情報を与える。そうすると、起きている可能性が高い(笑)。情報を最初に与えてしまうと、自分の目の前にテキストがあるのと同じ状態になってしまうと思うのですよ。僕が、たとえばある情報を、英語のこういう構文があるということを教えてしまうと、これはもう目の前にテキストがあるのと同じです。英語のテキストが目の前にあつたらすぐに寝ますから。それは極力避けなければならぬ。何をやってもいいから、ジェスチャーでも、日本語で怒鳴ってもかまわないから、何か言ってみるといって、そこで「私はこの内容を英語で伝える言い方を知らない」とい

うことが判ったときに、はじめて聞く態勢ができると思うんですよ。いろいろな作業をさせることによって、そういう態勢を作らせるきっかけを与えるようにしようと思っています。

**中山** そうすると、作業というものは非常に重要であるわけですが、講義形態の授業ではなかなかやりにくい部分もあると思いますが？

**新井** それに関係するのですが、皆さんそれぞれどのくらいの人数のクラスでやっておられるのか知りたいのですが。

**高屋** 英語の1年生の授業では、基本的に25~30名弱ですね。ただ、この中のAdvanced Englishというのは、これは非常に少ないです。火曜5限の授業も持っているのですが、4人登録して2人しか来ない。毎回お茶を飲みながら。彼等は英語をやり、私はお茶とお茶菓子を用意して(笑)。

**佐野** 一応登録は64名ですが、レポートの提出状況からすると、常時出てきているのは50名くらいでしょうか。

**鈴木** 私の授業は69人登録で、65名が来ています。

**森** 約200名の学生が登録しています。最初にシラバスを解説したのですが、その際に授業の決めごとをしまして、携帯電話や私語を禁ずるといった基本的な注意はしました。その効果があったのか、しばらくは静かに授業をうけてくれました。

登録学生数は多いのですが、自分が学部生の頃は、一般教養の科目などという、来ている学生が少なく大教室ががらんとしている、というような大学におりましたので、そういう状況を想定していたものですから、来週来たら授業に来ている学生が半分以下に減っていたらどうしようと(笑)、そういうことを思いながらシラバスを作っておりました。しかし、4月から授業が始まってみると、毎回教室に入るたびに、そのようなことはなく、その度にほっと胸をなでおろしておりました。

少し暗い話をしますと、私としては毎回毎回反省でした。途中からは後ろのほうで私語をする学生も出てきました。私のほうも余裕がなくて、後ろのほうまで廻るというようなことも、考えていましたが実際にはできず、注意することも最初の頃はなかなか出来ませんでした。しかし、やはり目立ってくると周りの学生にも迷惑なので2回ほど注意をしました。それ以降は静かになりました。あと、途中退室もありましたが、それに対しては私は何の措置もできないままでした。皆さんの話をうかがって、やはり1回目にあらかじめ厳しく言うておくべきだったと反省をしております。



**森 悟朗**  
(研究開発推進機構助教)

ただ、最初に教壇に立った瞬間といいますのは、全く初めての体験でしたので、これまでに感じたことのない衝撃を受けました。学会発表などはまた違った、感動とも何ともいえないのですが、衝撃としかい

ようがないのですが、ああ、何か凄いところに立っているなという感じがいたしました。

授業の工夫としては、「神道と文化」も「宗教概説」も、神道や宗教にそれほど関心も知識もない学生を想定して、一般にも良く知られている現象から紹介し、その歴史的・社会的背景を解説することを心がけました。それに関連づけて基礎知識を講義しました。また、これら2つの講義は、社会現象や宗教現象を教える授業ですので、画像・映像の果たす役割も大きいと考えています。そこで、講義では可能な限り画像や映像をプリントやスクリーンに提示し、学生に視覚的に理解・記憶してもらうことによって、実際の社会・宗教現象の理解に役立ててもらいたいと考えています。ただ、現状としては思うほど充分には素材が用意できていないのですが…。

**中山** そうすると、かたや大人数の授業で、かたや高屋先生のように少人数ということになりますけれども、高屋先生は教育のほうも勉強しておられると思うのですが、そういうような森先生の状況について、こうやったらどうか、こうすれば良くなるんじゃないか、というようなアドバイスがありましたらお願いします。

**高屋** 僕は、その大人数授業というのを経験したことが、教える側としても教わる側としてもほとんどないのですけれども、まあ、語学の授業ですと、200名というケースはなかなかありませんが、少人数に分けてグループワークさせるというのはわりとよくやりますね。

**中山** 高屋先生は大人数の授業はほとんど経験されなかったということですが、反面、佐野先生が学生だった頃ですと、大人数授業というのがほとんどだったのではないですか。

**佐野** そうですね、必修科目は150~200人でした。ただ、やはり今とは違いますね。私語もありませんし、出て行く人もいなくて、先生方はやりやすかったのではないのでしょうか。

**新井** ただ、出て行く学生に注意するにしても、今のご時世では、たとえば手洗いに行こうとしているのを呼び止めて、みんなの前で「手洗いです」とか言わせるのが果たしていいのかどうかというのが、悩むところがある。難しいですね。

**佐野** 私は年齢が得しているんじゃないかと。「何処へ行くの」と聞きますと、「戻ってきます」と言ひまして、そうしたら本当に戻ってきましたね。多分年齢の差もあるんじゃないかと。

**新井** ただ、何かこう「どこへ行くんだ」といって、その理由を訊くのになんだか躊躇してしまう部分がある。しゃべっている人間には注意できても、出て行く人間には……。

**佐野** 気分が悪いのかもしれないし……。

**新井** そうなんです。ましてや、ものすごく恥ずかしがり屋の子が、言えずにトイレに行くというようなこともあるかも知れないと考えちゃう。

**高屋** まあ、出て行くような学生にしても、それがいけないことだというのは判っていると思います。先生が近くにいなかったとすると、その目を盗んで出て行く。だから教員がどこに出没するか判らないと言う状態にしておけば……(笑)。ですから、小中学校の先生方などは、机間巡視というようなことをい

すけれども、机の間を歩き回りますよね、あれを講義なんかでもやってはどうかと。今はマイクのおかげで声も届きますし、ポインターを使えば見せられるので。

**中山** 机間巡視というと、赤井先生は非常に熱心におこなっておられるようですが、いかがでしょうか？

**赤井** そうですね、私の場合、「中国文学史」が120名、「記号と言語」が150名と、中規模クラスを全学では二つほどもっていたのですけれども、私も歩き回る教員ですね。基本的に板書と話が基本ですが、私も結構教室中歩き回って、寝ている学生は起こしますし、机間巡視についてはいくつかの方法を工夫してきました。

うちの大学では、大体300名以上を大規模クラスとって、これが前・後期で40コマ程度あります。これを抑制しなければならぬとは思っているのですけれども。かたや少人数、かたや大人数というのを私立大学の場合、折り合いを付けてゆかないと、経営的にも難しい面がありますので、大クラスは大クラスのご苦労もあるだろうし、小クラスは小クラスの工夫というものがあるかと思えますね。ただ、私は中規模の授業を二つ担当しているのですが、100名以上のクラスでも、歩き回ることと同時に、「インタビュー」と言っているのですけれど、マイクを使って、前回の授業の内容について学生に「これは何だったっけ」「どういうことだったっけ」と訊いて、コメントさせるのです。それで何人か、学生をいじる、という何ですけれども、学生に発言を促していきます。そうすると学生も緊張します。答えられないときは中国語で、「わかりません」とか、「もうすこし考えさせてください」というフレーズを教えておいて、それを言わせます。それが3人続くと、私のほうで答えをいうと。そういうふうな工夫をしています。

**新井** 私も、しゃべっている学生に対しては「静かにしろ」と注意するよりも、「質問なのか？質問だったら、今聞きます」と言う。すると大抵「いえ、何でもないです」と答えるので、「だったら静かにしなさい」という一連の流れでもっていく。恐らく彼らが一番苦手なのは、大勢の前で発言することだろうから、赤井先生のやり方は彼らにしてみれば結構つらいかも知れない(笑)。

**赤井** ええ、本当に口が重いですね、今の学生は。ただ、慣れてくると学生も、答えざるを得ないので、だんだん声を発するようになります。ただし、それが私語には繋がりません。授業に対する質問ができるようになるなど、効果はあると思います。

**中山** その方法は、早速次の授業から私も使ってみたいと思います。

早いもので、始まってから既に一時間近く経ってしまいました。お腹も空いたことかと思いますが、最後に、今後どういうかたちで授業を改善し、どんな授業に行きたいかというような、抱負を述べていただければと思います。

## 國學院の授業をよりよくするために

**新井** 120人の授業のほうは前期で終わりました。来年も同じ

授業を担当するとは限らないわけですから、今さらどうしようもないけれど、結果的にそこで一回得たものを、今後どう活かすかということだと思います。で、私の場合先ほど申し上げたとおり、「神道と文化」は120人弱ですが、逆に、「神道古典3」の授業は7名しかいない。相当なギャップです。7人の授業ですと、学生一人ひとりの顔が見えます。しかし120人のクラスだと顔が見えない、判らない。そうなると、顔が見える見えないでやはり自ずと接し方も変わってきてしまいます。しかし、本当はそうした受動的な変わり方ではなく、まずは自分自身がそうした形態に対応した形の授業運営や学生との距離感の取り方などを身につけなければならないな、と。自ら「変える」という風に。

**佐野** とにかく前期はいっぱいいっぱいでした。資料を作るだけで精一杯で、反省としては、やはり資料が多すぎたことですね。心配になってしまって、概説・概論ですから、なるべくたくさん教えたいというところがあって、あれもこれも取り入れすぎたところがあると思います。後期は、シラバスのほうも少し絞って、今までは大きな括りでやってきたのを、後期は個々の作家を少しずつ取り上げて作品の中に深く入ってゆこうと思います。概論として、文学というものをもう少し深く考えて行く。文学の面白さというものをもう少し分らせるような授業をしてゆきたいと思っております。

**中山** 私も最初の授業のノートを作ったときには、A4の紙で5枚分とか用意していたのですよね。そうしたら授業時間中に話し切れるわけがないと。それで失敗して、今はA4が2枚程度で充分時間が——いえ、まだ足りないという感じになります。

**佐野** そうですね。ですから、これでは学生もたまらないかと。結局判らなくて終わってしまうかも知れないと思いましたが、後期からはもう少し取り上げる作品も絞って、ひとつのものに集中して行こうと、そう思いました。

**鈴木** わりと学生からの反応がもらえたとおもうので、後期からは、佐野先生の話にもありましたが、作品をもう少し読んでみようと思います。何に学生が食らいつかかという、やはり実際に作品を読んでいくことなんですね。概論みたいな「こういう内容の作品があってね」というのだと、やはりあまり面白くない。作品を読んで、こんな展開があって、もしくはこういう感情を歌っていて、そういうのが読めるから面白いのだというのを伝えられればと。読んで面白いという実感、また読む力をつけさせることが加えて出来たらよいなど。そう考えています。

**中山** 高屋先生は今後國學院でやって行かれるうえで、今担当されている授業への抱負というのも当然ありでしょうし、それを含めて、國學院の英語教育を今後、こう伸ばしてゆきたいというような抱負がございましたらお願いします。

**高屋** 受講者の名前と顔をもう少し覚えなければいけないと思っています。特に通年で取っている学生については、僕は最初に「名前と顔は覚えなから」と言っているのですが、成績が良かったりしたら覚えると。まあ、大体悪い子から覚えてしまうのですが(笑)。そういうのじゃなくて、ちゃんと覚えよ

うと。私の同僚なんかはちゃんと覚えている人がいますけれど、それは結構大事なことなのですね。学生にとっては、「覚えてくれている」というのは大切だと思うので、見習わなければと思います。

それからもうひとつ、1年生の2学期目って僕は凄く大切だと思います。まあ、最初から大学に入ったら遊ぼうという確信犯は別なのですけども、たいてい1学期はそれなりに勉強しようと思っていて、それなりの成績をとるんじゃないかと思うのですが、2学期目になると、まずひとつは遊びを覚える。大学の雰囲気慣れる。そこへ2学期目で、成績が思ったより上がらなかったということになると、その遊びの誘惑の方に負けてしまって、努力しなくなるということがあるので、そこで少し、勉強とか、夢とか、希望とか、努力とか、そういうものを忘れさせない努力が必要だと思います。別に新しいことをやる必要は無いと思うんです。まあ、勉強させる、手を変え品を変え。理想は、遊びもいいけど、こちら面白いのだぞとやればいいのですが。ともあれ、びしびし厳しくやるというよりは、勉強も面白いということ伝えられれば良いのかなと思っています。

**森** 最初にお話ししたように、「神道と文化」は神道のことを全く知らない人が対象なのだと考えて始め、「宗教概説」も宗教の基礎知識をほとんど知らない人が対象と決めて始めました。とくに「神道と文化」の方は、あらゆる学科から受講生が出席しており、もしかしたら神道に反感を持っている人もいるかも知れない。そういう学生もいることを想定しつつ付き合ってもらおう。そういう人に向けても言葉を発して行く。神道というのはこういう信仰を持っている、人というのはこういうものなんじゃないか、ということ、私なりに伝えて、話を聞いてもらうという試みをしてきたのが「神道と文化」でした。その講義の試験結果を見ますと、自分が思っていたよりも——まあ持ち込み可だったので、プリントを持ち込めばできるのですが——できていた、というのが、私のやっぱり嬉しかった部分です。

私はやはり、神道や宗教に対する先入観をなくして、虚心坦懐に学んで欲しい、そういう人々が世の中において、みんな世の中は出来ているんだということをまず学んで、学んでから物事を考えるべきなんだと、そういうことを伝えたいと講義してきましたので、来年同じ授業をもつかわかりませんが、そういう機会があれば、もっと工夫して、必要な知識を身につけてもらいたいと思っています。

それで、神道については何も知らない人たちに対して私が授業で最初にやったのが、やはり身近にある神道の文化の発見でした。神社なりというものが、こんなに身近にあって、けれども人々があまり関心をもっていない。関心をもっていないけれども、そこにある。そこにあるということを理解するというのは、どういうことか。そういうことを最初に2、3回、校史も含めてやってきたつもりです。

そこで、先ほど申し上げましたように、現実の現象なり、歴史的な実際にあったことを解説するのが大切だと思いますので、教材の共有というか、センターのようなものがあれば、

よいのではないかと考えています。そういうのが学内にあり、ビデオやDVD、語学の教材でも共有できていれば、全体としてレベルが上がるのではないかと思います。それに、それぞれの先生が「奥の手」を持っているということは当然あると思いますので、そういう要素を付け加えてゆけるというかたちになればよいのではないかと思います。

**中山** 教材の共有というのは、確かに非常に大きいのではないかと思います。それと同時に、こうした話し合いの場の大切さというのもあります。今日の懇話会で感じる事ができたのが、やはり同僚や先生など、様々なひとと相談をして、アドバイスを受けて、授業を設定してゆくことの大切さでしょう。また、悩み



司会：中山 郁  
(教育開発推進機構助教)

があるときに色々相談をする相手が居るとというのが、授業設計の上でも、運営の上でも非常に大きいのではないかとことが感じ取れたかと思っています。それでは、時間も押し迫っておりますので、最後にセンター長の赤井先生に総括をしていただきたいと思っています。

**赤井** 貴重なご意見をありがとうございました。初年次教育・導入教育の観点から、1年次が大事で、2年次が空白になるという指摘は前々からあったのですが、今回のご指摘で2学期目、秋学期が大事だという点、制度設計の面に活かせればと思います。

本学においては残念ながら、退学する学生が全学の学生の2.8%、卒業延期率は16%という、極めて高い数値が出ております。無論、進路変更して他の進路へ行くというのなら、退学しても構わないのですが、大学で修学する意志がありながら、やめざるを得ない、もしくは卒業を延期せざるを得ない学生がいるならば、それに対してはやはり、機構をつくって、恒常的な学修支援を行う必要があり、教師と学生に対する支援態勢を整えてゆきたいと思っています。

そのためには、司会からもありましたが、同僚や先輩からの助言や指導、ピア・レビューとか、メンターという言葉で呼ばれていますが、相互に研修することが大切ですし、「教えることは学ぶことの半ばなり」という言葉がありますけれども、教員もやはり、それぞれご苦心されたり迷ったりされている。今いただいた意見を、全学的に、無論制度として反映させるところは制度として反映させますけれども、教育というのは人との関わりの上に成り立つので、やはり人に対する効果的な支援体制を構築できたらと考えております。今日は貴重なご意見をありがとうございました。

**中山** ありがとうございます。それでは長時間にわたりましたけれども、第2回教育開発懇話会、新任教員対談を終わりたいと思います。先生方、どうもありがとうございました。

# 大学授業

講義、ゼミと形態は異なれども、「授業」は大学の生命そのものです。その生命たる授業に、まさしく生命をかけている多くの教員が國學院大學にいます。その努力に基づく授業は、学生たちに知的な刺激として受け入れられることによって、初めて実を結んでいきます。つまり、授業の場とは、教員と学生の真剣勝負の場であり、かつ、よい授業とは、両者の共同作業によって、はじめて生まれるものであるといえます。

そこで、本コーナーでは、本学で素晴らしい授業を行っている先生方に、その努力と工夫について語ってもらうとともに、授業を受けた学生たちが、何を思い、知り、感じたかについて紹介していきたいと思えます。

第1回目となる今回は、本学経済学部准教授で、学修支援センター委員としても活躍されている東海林孝一先生に、担当授業の「管理会計Ⅰ,Ⅱ」を中心に、授業運営の工夫について紹介してもらいます。そのうえで、この授業を受けた学生2名から寄せられたコメントを紹介いたします。

## 教員の授業努力



「管理会計Ⅰ,Ⅱ」  
東海林孝一  
(経済学部准教授)

私が担当する講義科目は、1年前期に「簿記と財務報告A」1年後期または2年前期に「簿記と財務報告B」、2年次に「管理会計Ⅰ」、3年次に「管理会計Ⅱ」の順で履修するように、年次配当や前後期の配置を組んでいます。

この4科目全てにおいて第1回の授業でアンケートを採ります。簿記の授業では簿記検定等の資格取得（または取得する予定）の有無、高校や専門学校で簿記を学んだ経験の有無について聞きます。大学での簿記は、会計学の授業の前提として行われるのであり、専門学校と異なって資格取得を念頭に置いているわけではありません。しかし学生の資格志向が強いのも事実であるため、例えば「簿記検定2級を目指す場合には、〇〇についても学習しておいて下さい」といったアドバイスを入れるように心がけております。また管理会計のアンケートでは、会計学科目ですでに単位を修得した科目や平行履修している科目等も聞いて、どの程度の知識や技法を前提にして授業をするのかの目安にしています。

授業はプリントを中心に進めています。プリントはB4版3枚が標準で、大きく3つのパートに分かれています。第1のパートは前回授業の復習です。10分程度の復習問題を解いてもらっている机間巡視し、前回授業の習熟度を確認します。習熟度の程度によっては解説を工夫します。第2のパートが今週のメインです。概念や定義、計算式などはなるべく空欄に記入するようにプリントを作り、定義を聞いている間、睡魔に襲われないようにしています。要は常に手を動かすようにプリントを組み立てます。学生から「私語をしているヒマがない」と言われますので、この作戦は成功していると思えます。第3のパートは10分程度の当日の復習問題です。第1のパートと同じく机間巡視して習熟度を確認し、来週のプリント作成の参考にします。この机間巡視によって居眠りをしている学生は起こして勉強させます。200人ぐらい出席していても起こされるのは多くて数名で、緊張感を保つのにとても有効です。またきちんとできている学生は褒めるようにしています。声をかけることによって、次からは挨拶をしてくれるようにもなります。

授業の前日はこのプリントを自分で解答しながら教師

# 最前線

—教員の努力! 学生のまなざし!—

用マニュアルを作成し、教室毎に異なる黒板のどの部分に何を書くのかも決めておきます。とかく機械的、無機的になりがちな会計科目ですので、「睡魔避け」のジョークネタやスポーツ芸能ネタもダブることがないように用意しておきます。学生の反応はご想像にお任せします。

K-SMAPYはとても役立つツールですが、教材機能は使っていません。私はいつも履修者数の130%程度のプリントを用意します。平均の出席率は85%程度ですのでかなり余るはずですが、実際には、復習用に持ち帰る学生がいますので10%~15%程度が残ります。この残りは次回以降の授業に持参しますので、欠席した学生は受け取ることができます。例えば、2週分まとめて受け取りに来るような学生には出席を促しますし、解答に際しての注意点なども簡単に伝えるようにしています。徐々に持ち運ぶプリントの量が増える難点がありますが、試験前にはなくなります。

経済学部卒業生のほとんどが企業に就職することを考えれば、会計は社会人としての必須の知識です。ですから履修した学生の全てが理解できるように工夫しているのですが、顧みれば半期14回の授業のうち、自分自身で「よくできた!」と満足できる授業は2回~3回程度です。時々出席カードで出席をとりカードリーダーの不正利用を牽制するとともに、出席カードの裏によく分からなかった箇所を記入してもらうなど、学生の声を反映するように心がけているのですが、「途半ば」というのが正直なところです。



学生のまなざし

## 受講学生からのコメント

### ①Aさん(経済学部・女性)からのコメント

管理会計ⅠとⅡの講義を聞き良いと感じたことは3つある。1つ目は授業時間の厳守、2つ目は先生の話し方、3つ目はプリントの内容である。

1つ目の授業時間の厳守は時間チャイムと同時に始まり90分しっかりとした計画を元に授業が作られている。当たり前のことなのかもしれないが、大学ではこのような授業が少ないと感じるためとても好印象であった。

2つ目は先生の話し方である。90分やっても内容が面白いので集中できる。私達がわかりやすいように、よく利用する企業を例に説明している。難しい内容でもイメージしやすい。そのため授業を受ける側のモチベー



先生から次々とくり出される課題を電卓を武器に解いていきます

ションも自然と高まってくる。そして先生が生徒の理解度をしっかり把握している。生徒が理解しにくい内容は何回も練習できるような授業になっている。一回では理解が難しい内容でも、繰り返し練習できるので生徒もわかるようになる。そして、解けることにより授業に集中できる。

3つ目はプリントの内容である。プリントは自分で書く部分が多く、手を動かす機会が多くある。ただ聞いているよりも自分で書くためより頭に入ってくる。計算する部分では計算しやすいような数値に設定してある。それにも関わらず、実際の企業と離れすぎないバランスの数値で構成されている。そのため計算が簡単であり、大体の数値のバランスも身につくのである。

最後に授業を通じて学んだことは、管理会計についてだけではない。話し方で生徒が興味を持つか持たないか授業の仕方で変わってくるということ、プリントの構成や授業の流れなど参考になることがたくさんあった。先生が生徒を好きなのだということもよく伝わってくる。私は授業がずっと楽しくて仕方なかったので難しいと感じることはなかった。損益計算書の数値を計算することによって仕組みが分かるようになった。そして損益計算書を見ることも抵抗がなくなったのである。これにより財務会計など他の授業でも役立った。

## ②Bさん（経済学部・男性）からのコメント

私は、企業が多様な会計情報、マーケット情報を使つてどのように意思決定をしていくのかなど、企業活動について詳しく学びたいと思い管理会計Ⅰ、Ⅱの授業を受講しました。

まず、Ⅰでは簡単な数値例などを使い損益分岐点売上

高を計算したり、見積損益計算書を作成する方法を中心に学びました。簡単な数値例と言っても、初めは慣れないので、計算ミスなどもありました。しかし、東海林先生は、実際に受講生に問題を解かせて何処が出来ないのかを把握しているので、授業プリントは毎回苦手な所を復習出来る構成になっていました。そのため、何度か解いていくうちにスラスラ出来るようになりました。この他Ⅰでは、伝統的な管理会計以外に新しい手法なども学びました。具体的には、バランススコアカードやシェアードサービスなどです。先生は、知っていて損はしない、さらに、実際の業務で使うもの以外教えないので、眠くもならず効率的に学習内容が頭に入ってきます。

そして、Ⅱでは原価計算を中心に学びました。原価計算では製品の原価を求めたり、どこにコストが多く発生したのかを分析するなどしました。複雑な例ではないものの、製品の種類によって原価集計の方法が異なったり、一つの製品に様々な原価が付随しており、いかに多くの売上を残すかという事も勿論重要ですが、コスト意識を持つ事の重要性も分かりました。



絶えず学生の作業を見回り、すかさずアドバイス！

管理会計では会計以外に経済学も経営学の知識も要求されます。ですから、それだけ難しい学問と捉える事も出来ます。しかし、私が授業全体を通して感じたことは、企業活動を詳しく理解するには、会計学、経営学、経済学など様々な知識が結集されて初めて見えてくる事だということです。そうだとすれば、こういったところにも管理会計の面白さがあるのかも知れません。

最後に、漠然としています。管理会計Ⅰ、Ⅱの授業は、厳しい中にも面白い要素が数多くあるので、企業活動に興味のある人も、何に興味があるか分からない人も、学ぶ楽しみを再認識させてくれるような新鮮な授業でした。

# 教育開発推進機構彙報

(平成21年4月1日～10月30日)

4月1日	教育開発推進機構設立(若木タワー8階)、機構設備搬入
4月2日	教育開発推進機構、専任教員打ち合わせ
4月15日	教育開発センター委員会(第1回)
4月22日	運営委員会(第1回)、共通教育委員会(第1回)、第一回学修支援センター委員会(第1回)
5月20日	教育開発センター委員会(第2回)、共通教育センター委員会(第2回)、学修支援センター委員会(第2回)
5月6日～29日	文部科学省平成21年度大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム(大学における教育の質保障の取組の高度化)申請支援
5月25日～6月6日	専任教員による授業公開実施
6月6日・7日	大学教育学会第31回大会(於、首都大学東京南大沢キャンパス)に小濱助教、中山助教参加
6月17日	共通教育センター委員会(第3回)、学修支援センター委員会(第3回)
6月24日	教育開発センター委員会(第3回)、國學院大學FD推進委員会(第1回)
6月26日	第1回教育開発懇話会 報告者：白川博一(教育開発センター副センター長・総務部次長) 題目「FD10年史と教育開発センターの役割」
6月22日～7月18日	学生による授業アンケート実施
7月1日	平成21年度前期FD講演会開催(FD推進委員会・教育開発センター主催) 講師 羽田貴史氏(東北大学高等教育開発推進センター教授) 題目「教員の能力開発と大学教育開発の課題—大学の担い手をどう育てるか—」

7月15日	運営委員会(第2回)、共通教育センター委員会(第4回)、学修支援センター委員会(第4回)
7月22日	教育開発センター委員会(第4回)
7月21日	新井助教、中山助教、地域科学研究会高等教育情報センターセミナー「教員評価・人事制度の進化と運用Ⅱ」に出張
7月30日	第2回教育開発懇話会(新任教員対談会)対談参加者 赤井益久(教育開発センター長)、新井大祐(本機構助教・神道文化学部兼任講師)、佐野あつ子(文学部兼任講師)、鈴木 崇義(本機構助教・文学部兼任講師)、高屋景一(文学部助教)、森悟朗(研究開発推進機構助教・神道文化学部兼任講師) 司会 中山 郁 (本機構助教・神道文化学部兼任講師) 記録 小濱歩 (本機構助教・神道文化学部兼任講師)
8月19日	文部科学省平成21年度大学教育・学生支援推進事業【テーマA】ヒアリング支援
9月1日・2日	小濱助教・鈴木助教、日本リメディアル教育学会第5回全国大会(於、千歳科学技術大学)に出張
9月16日～9月27日	3号館落成に伴う移転のため、機構業務休止
9月17日	若木タワー8階より3号館3階に移転
9月28日	機構業務再開
9月29日	運営委員会(第3回)
10月7日	教育開発センター委員会(第5回)、共通教育センター委員会(第5回)、学修支援センター委員会(第5回)

# 私たちがお手伝いします！

## — 教育開発推進機構教職員紹介 —



教育開発推進機構には4名の専任教員と3名の兼任教員、そして3名の事務職員を配置し、本学の教育力向上と教養教育に関する調査・研究と、それに基づく企画立案、全学及び各学部における人材育成の支援、学修支援センターにおける学生への相談業務など

を行っております。機構の教職員一同、先生方や勉学の一層の充実を望む学生の皆さんのお手伝いを通じて、本学をよりすばらしい学び舎にしていきたいと考えております。どうぞお気軽にお声かけください。

(五十音順)

### 新井大祐 (教育開発センター助教)

専任教員

学 位	修士 (神道学)
研究分野	中・近世神道思想史、神道古典
メッセージ	私自身、この大学で10数年間学んできました。教員として、院友として、そして一先輩として、本学の教育と学生の皆さんの発展のために力を尽くしたいと思います。

### 小濱 歩 (共通教育センター助教)

専任教員

学 位	博士 (神道学)
研究分野	神道古典、日本古代思想
メッセージ	学ばねばならないことは私自身多いと思います。学生の皆さんのお役に立てるよう頑張ります。

### 鈴木崇義 (学修支援センター助教)

専任教員

学 位	修士 (文学)
研究分野	中国古典文学、漢魏六朝辞賦文学
メッセージ	皆さんが充実した学生生活をおくり、社会に力強く羽ばたいていけるよう、ちょっとだけ“あと押し”をします。一緒に考えていきましょう。

### 中山 郁 (教育開発センター助教)

専任教員

学 位	博士 (宗教学)
研究分野	山岳宗教史、近現代宗教史
メッセージ	本学の学生の皆さんの教育充実のために、山で鍛えた頑丈な身体を元手に、パワフルにがんばってまいります！

### 職 員 (教学事務部教務課員)

#### 川島富貴子

学修する上での「もやもやあ〜」を「スッキリ!!」にできるようにお手伝いします。一緒に一歩を踏み出しましょう!!

#### 谷口 君子

新しくなった國學院大学で皆さんの良い思い出に残るようお役に立ちたいと思います。

#### 藤沼恵美子

学生さんが気軽に相談に来られるような雰囲気を作り出せればと思います。

## そっ たく どう じ 啾 啄 同 時

### — 編集後記 —

教育開発推進機構発足に伴い、その機関誌として本誌を発行する運びとなりました。今後、本学における教育改善の取り組みを広く学内外に紹介するとともに、学生・教職員が教育について考え、語ることのできる誌面作りを目指していきます。編集後記の題「啾啄同時」は、禅の語録に由来します。ヒナは卵で生まれ、内側からヒナが自力で卵を割ろうとするときに親鳥がそれを手伝います。内側から卵を割ろうとしなければヒナはかえりません。学生の自立と積極性を支えていこうとする本機構の目的をこの言葉に託しています。(赤井)

教育開発推進機構NEWSLETTER『教育開発ニュース!』第1号 平成21年11月4日発行

発行人 赤井益久 編集人 中山 郁・新井大祐 発行所 國學院大學教育開発推進機構 〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28